

## ネパール大地震2015 (3)

### 第3報(メモ)5月1日

#### 1. 4月30日の行程

日本大使館、JICA 事務所、カンティプール病院、ADRA,タメル地区、飛行場、往診。

#### 2. 知り得た情報

##### 1) JICA 事務所

日本からの緊急援助隊などの受け入れがしやすいように、事務所をエベレストホテルに移し対応している。健康連絡員の栗林さん、NGO デスクの西前さんから話を聞く。清水所長に挨拶。

\*カトマンズ市内、地震当日、翌日の混乱が収まり、病院も落ち着きを取り戻してきた。医療スタッフはどこも足りている。

\*カトマンズで活動していた協力隊員を一時(約1か月)日本に戻す。

##### 2) ADRA

日本人スタッフ、小川さんに話を聞く。被災が激しかった地域の一つ、カトマンズの西、ダーディン地区で救援活動(物資の配布)をし、昨夕もどる。

\*被災地はかなりの家屋が倒壊した。ただ死傷者はそれほどでない。救援の人では足りている。10人を超えるインド人医師が救援に入っていた。

\*いま必要なのは、人でなく物資。雨露をしのぐテント、マット、生活用品。ADRA ネパールの支援国、関係国から物資は入って来るがまだ足りない。

##### 3) 新聞、街の人、車の運転手、電話等から得た情報

\*徳洲会救援チームの先発隊は30日、バクタプールの岩村記念病院職員と共に今回の地震で一番ひどく被害を受けた、シンドバルチョーク地区に30日視察に行く。次に来る本体活動の適否判断のため。帰り次第報告をくれるとのこと。

\*カトマンズの9割近くの店(銀行、両替所、役所、学校も含め)が閉まっている。もともとカトマンズに住んでいた人の8割近くは田舎からの人で、田舎の被災の状態を心配し、またカトマンズで疫病がはやる可能性があるとの政府の発表などを聞き、続々田舎へ帰還している人が多く、店のホテルの従業員がいなく、店を開けられない。来る観光客も激減し、タメルの殆どの店が閉まっていた。空いているのは一部のホテルとレストラン、小商店。

\*新聞の報道によると、ネパール人の若者がボランティア活動に目覚めた。組織化し救援活動を開始、その数カトマンズ市内だけでも5万人を超える。(Kathmandu Post)

\*国際線の多くが定時に着くようになる。救援機を夜中発着させ始める。飛行場に警察を始め、諸外国が案内デスクを設けだした。日本もその一つ。日章旗の下(各

国もそれぞれの国旗を掲げている、日本の隣は韓国)机が一つ、3人の大使館職員が座り、出国者の様子などを記録していた。2人の職員はパキスタン、インドネシア大使館からの応援とのこと。飛行場、場内はわからないが場外の混乱はない。

### 3. 印象と評価

\*もともとカトマンズ市内、医療従事者は過剰気味であった。混乱期(被災後の数日)を過ぎれば近郊の被災地から、患者が搬送されても対応可能。加えて、カトマンズ市内の住民は普段の半分以下。日本を含め、外国からの救援者もかなり応援に来ている。ネパールの青年たちもボランティアに参加した。今後諸外国に求められるのはヘリコプター、シェルター、住宅用品、生活用品、水、電気などのインフラ。資金。助言のようだ。ここ数日の印象では外国からの医療人の直接の応援は、一部整形外科の医者を除いて必要ないようである。人より、物資、資金との声をどこでも聞く。人はネパールにたくさんいる。物資と資金をどこにどのように届けるか。

\*JICA,青年海外協力隊員を一時日本に戻すとのこと、相手団体職員が出てこない、来られない、仕事場が閉まっている、被災後の病気蔓延も含め、混乱が予想されるため、日本からの指令があつての決定だと思われる。

### 4. 今後

\*倉辻元 JOCS ワーカーのじょげんもあり、Child Fund Japan(激しく被災したシンドバルチョークにプロジェクト(里親、奨学金)を持っている)の田中代表の話を聞くなど、もう少し情報を集める。

\*今日、到着する、福島医科大学救急部の2人の医師を含め、話し合い、日本からの救援者の活動場所を決めていく。

\*一部始めているが、救援活動で資金が必要な団体に支援金を渡す。